

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.188

2018年1月4日

発行所 兵庫教育文化研究所

〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

自分の命は自分で守ろう 防災教育部会 授業研究会

12月、姫路市の小学校で、防災教育部会の授業研究会を実施しました。この学校の4年生では、「自助力」を高めようと、1年をとおして防災教育にとりくんでいます。

今回の単元は「災害時における避難行動」を身につけることをめざしたものです。避難する状況は、登下校中や休日など、子どもたちだけの場合もあります。そこで今回は、校外で子どもたちだけのグループが「洪水」や「地震」にあった場合を想定し、どのように行動できるかを体験し、その様子をビデオで記録しました。その際には防災教育部会のメンバーも協力し、ビデオを手に子どもたちのあとをついて走りました。

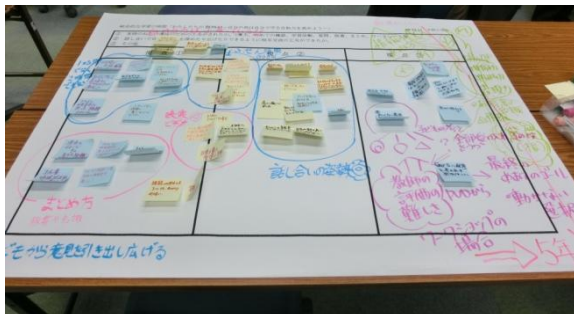
今回の授業は、その記録映像を見て、「自分もそうする」や「自分はこうする」を見つけて話し合うことで、よりよい避難行動について考えるものでした。子どもたちは、映像を見ながらつぶやいていたいろいろな気づきを次々と付箋に書き出していきました。そして、グループ内で交流しながら、自分と同じ気づきや自分にはなかった発見から、めあてのとおり「よりよい避難行動」を学べたのではないかと思います。



事後研究会では、まず授業者から、防災教育にとりくんでいる以下のような思いが語られました。

子どももおとなもあまり防災・被災についての経験がない中で、

①知識を増やす ②自分ができることを増やす ③自分のこととして考えられることをめざしている。今回のとりくみを「1.17」や、家族ぐるみでの学びにつなげていきたい
そういう意味でも、この時期に実体験としてとりくめたことは大きかったと振り返られました。



その後、子どもたちと同じように、参観者それぞれの気づきを付箋に書いて出し合い、まとめていきました。参観者からは、ポイントをまとめた記録映像の素晴らしさや、付箋を使ってまず自分の思いを書くことで、自分のこととして考えることができていたのではないかと、というような意見が出されました。

最後に協力研究所員が「防災の科学的な知識は必要で、高学年では教科の中でそれに関連する学習をすることができる。4年生ではまだその機会がないが、今回のように事前に学習したことが次年度以降につながっていけば、よりよい学びになる」「震災の体験を伝える場面は『おとなから子ども』となりがちだが、それでは子どもには伝わりにくい部分もある。今回は記録映像をとおして子どもから子どもへというとりくみだったので、より伝わりやすかった」とまとめられ、閉会となりました。